

序

最近の画像診断最大のイノベーションは、マルチスライス CT の登場であろう。マルチスライス CT によって、この空間分解能と時間分解能の両立が可能となり、画像診断に大きなインパクトを与えた。泌尿器、特に腎臓の画像診断も例外ではない。一方、MRI にはコントラスト分解能という持って生まれた強力な武器があり、あまり動かない骨盤内臓器では大きな力を発揮する。従来より泌尿生殖器の画像診断は排泄性尿路造影を基本として、消化器画像診断とは独自の道を歩んできていたが、排泄性尿路造影などの検査の意義が薄れ、診断の中心は CT や MRI などに完全に移行してしまった。また、近年のマルチスライス CT の進歩によって、腹部と骨盤部が同時に撮像されるようになり、その垣根もだんだん取り除かれつつある。

本書は、そのような新しいスタイルの泌尿器の画像診断をテーマとして取り上げたものである。他の KEY BOOK シリーズ同様、代表的な疾患、重要疾患を取り上げ、原則として見開きで提示している。一見、初心者向きの本にも見えるが、内容は非常に充実したものになっている。執筆者は我が国の泌尿器画像診断のオーソリティであり、症例の充実、画像の質、記載の的確さなどは他の本の追隨を許さない。また通常の撮像法のみならず、CT urography や拡散強調画像、スペクトロスコーピーなど、泌尿器画像診断で使う最新の画像診断法を網羅しており、文字通り泌尿器画像診断の決定版になったと考えている。

特に本書では鑑別疾患と文献の充実に力を入れている。各臓器の初めに解剖、正常画像、臓器ごとの画像診断法のポイント、どのように鑑別を進めるかを簡潔に述べている。さらに、各症例においても随所に関連した鑑別疾患を挿入している。また文献においては、できるだけインターネットで見ることができる論文を引用した。特に RadioGraphics などの文献を引用して、症例を発展させたり、病理像も引用できるように努めているので、本書に留まらず是非これらの文献にも当たって欲しい。また分担執筆ではあるが、参照ページを多く入れ、全体を通して有機的に連携させた。

本書を通して、少しでも多くの方に泌尿器画像診断に興味を持っていただき、是非、日常臨床に活用していただきたい。多忙な中、執筆を快く引き受けていただいた先生方、本書の出版に当たり、編者のわがままな要求をやさしく受け入れてくれた秀潤社 画像診断編集部の原田顕子氏に心より感謝する。

2008 年 8 月
山下康行